



東京のレトロ建築を歩く

第 8 回

法務省旧本館（赤レンガ棟）

明 治政府によって霞が関に建てられた官庁のうち、唯一現存するのがこの法務省旧本館だ。赤レンガ棟の愛称で呼ばれる。

当時、明治政府は諸外国との不平等条約改正に際して、近代国家としての行政、司法体制を整えるため、そして日本が欧米諸国と肩を並べる国であるとアピールするために、西洋式の建築による霞が関での官庁集中計画に着手していた。

その設計のためにドイツから招かれたのが、ドイツ人技師のヘルマン・エンデとヴィルヘルム・ベックマン。いわゆるお雇い外国人である。

明治19年（1886年）に、まずベックマンが来日。現地調査、政府との意見交換後帰国、翌年、設計案を携えてエンデが来日した。しかし、日本の財政悪化等により計画は大幅に縮小され、実際に建てられたのは、司法省（現在の法務省）と大審院（現在の最高裁判所）だけであった。

赤レンガ棟は明治28年に完成した。レンガ造り3階建て、急勾配の大屋根を備えたネオ・バロック様式の威風堂々たる建物であった。

施工中の明治24年に濃尾地震が発生したこともあり、レンガと鉄骨を組み合わせ、アーチ状の構造にするなど耐震性も強化された。鉄骨には一部、鉄道のレールも使用されたという。



赤レンガ棟正面



レンガづくりのアーチ構造部。建設当時のまま残されている



建設当時のレンガ壁も保存、展示されている

DATA

名 称 法務省旧本館
所在地 東京都千代田区霞が関 1-1-1
完 成 明治 28 年
設計者 ヘルマン・エンデ
ヴィルヘルム・ベックマン



昭和の改修工事時に改修された階段と照明



明治の雰囲気をいまに伝える復原室（旧司法大臣官舎大食堂）の扉

大正 12 年（1923 年）の関東大震災でもほとんど被害を受けなかったが、昭和 20 年（1945 年）に空襲を受け、レンガの壁と床を残し焼失する。

昭和 25 年に改修され、法務省の本館と

して使用されてきたが、平成に入り建物復元の気運が高まる。平成 3 年（1991 年）より工事が始まり、平成 6 年に建設当時の姿に復原された。

内装は資料が少なかったが、旧司法大

臣官舎大食堂の写真から復原。現在は法務資料展示室（復原室）として公開されている。
平成 6 年 12 月、国の重要文化財（外観のみ）に指定された。

